日本生理学会における男女共同参画の歩み

ーメンター制度への取り組みー

2004-2005年度

アドバイザー制導入までの経緯

2003年3月　男女共同参画委員会にて、メンターについての情報提供（委員長）。

＊アドバイザー制に関するワーキンググループ（2名）決定。

メンタリング（mentoring）とは：知識や経験の豊かな人々（＝メンター）が現時点でまだ未熟な人々（メンティ）に対して、キャリアや心理・社会的な側面から継続して行う、キャリア成功を目的とした、一定期間の支援行動を意味する。

語源は、ギリシャ神話のオデッセイが息子テレマコスの教育をメントールという男性に任せ、メントールはオデッセイの遠征中から成人に至るまで、テレマコスを教育したという伝説に由来。この由来に基き、今日では、メンターという言葉は人生経験の豊富な人、支援者、指導者、後見人、助言者、教育者の役割を全て果たす人を包括的に意味する言葉として用いられるようになった。

もともとの意味のメンターは、制度で導入されたものではないが、組織の中でマイノリティは個人的にメンターを見つけにくいという実態があることから、現在、アメリカの多くの企業では、メンター制度を導入し一定の効果をあげている。

2003年7月　委員会にて、相談者およびアドバイザーのプライバシー保護、
通信の機密性などが議論された。

↓

あまりの問題の多さに実施不可能に思われる！

2004年6月　札幌の生理学会大会にて、

＊男女共同参画委員会・生理学女性研究者の会の合同ワークショップを開催。

「IBMにおけるメンタリングプログラム」

と題して日本IBM（株）・理事の渡辺善子氏に、企業での取り組みについての講演を聞いた。

↓

多くの心配は杞憂であると感じられた。

男女共同参画委員会・生理学女性研究者の会の合同ワークショップ

生理学会会長（当時）の金子章道先生も
渡辺講師に質問

渡辺善子講師

＊学会中に相談や助言について、経験や希望を問う小規模のアンケート をとった。回収数49通、うちアドバイザー制を肯定するもの80％

2004年10－11月　システムの骨組みを決定し、HP案内文等作成。

2005年2月15日　HPに案内を掲載し、アドバイザー制開始。

掲載数時間後に一名の相談（相談者は女性、将来のポジションに関することなど）が寄せられた。アドバイザーに指定がなかったので、窓口委員、委員長が3名にアドバイザーを依頼し、各アドバイザーから助言が寄せられた。

議論した点

1. **対象者**：女性に限らず、会員すべてとする。（アンケートでは、相談したい内容が男女を問わない項目が多かったため。）

2. **アドバイザー**：当面男女共同参画委員がつとめ、各々どの領域の相談項目に応じられるかをあらかじめ委員会で示しておく。相談者は希望するアドバイザーを指名できる。特に指定がなければ、後述の窓口委員がアドバイザーを選定・依頼する。

3. **申し込み**：アドバイザーのうち2名を窓口委員とし、そのアドレスにメールで申し込む。（通信の機密性などの問題から、どの手段がベストかの論議もあったが、即時性や若い人には手紙より抵抗がない、などの理由からメールを採用した。）

4. **プライバシー保持**：アドバイザーは相談者のプライバシーを保持する義務を負う。これに関連し、匿名の相談を受け付けるべきかの議論もあったが、原則は相談者もアドバイザーも氏名を明らかにすることとした。（窓口委員がアドバイザーに依頼する段階では、相談内容のみ伝え、相談者氏名は伝えない。）

5. **相談は数回で終了**することを原則とした。セクハラなど双方の言い分を聞く必要がある場合は、相談者の所属組織のセクハラ防止委員会などへ訴えるよう助言する。

6. 特別の事情がある場合、**通信手段**などについては、窓口委員・委員長を中心に、個々に対処することとした。

生理学会ホームページ中のアドバイザー制のページ

日本生理学会

Last updated: 2005/2/15

ホーム　お知らせ　生理学とは　生理学を学ぶ　組織情報　入会案内　>>会員サイト

ホームへ戻る

アドバイザー制についてのご案内

生理学会男女共同参画推進委員会では、キャリア形成や研究を続ける上での悩みに対し、会員のアドバイザーが助言する「アドバイザー制度」を設立しました。

「アドバイザー制」についてのご案内

生理学会男女共同参画推進委員会では、キャリア形成や研究を続ける上での悩みに対し、会員のアドバイザーが助言する**「アドバイザー制度」**を設立しました。これは、相談者に対して助言を与え、成長を見守る**「メンター」**（注）システムを参考とし、特に周辺に相談できる人がいない会員（男女問わず）を支援するものです。

先に２００４年６月の札幌での生理学会で委員会が行ったアンケートでは、過去に相談できる人を必要とした経験のある人は 49回答中31名（61 %）でした。また、誰に相談したかという問いに対し、28 %(14/50)が「同じ分野の指導的立場の人(含･元の指導教官)」と答え、「直属の上司･指導者」や「同じ所属の同僚･先輩」を上回っていました。これらの数字は、部分的なものとはいえ、相談内容によっては、身近に相談できる人がいない現状を反映しています。また、現にメンター制を導入しているＩＢＭでは、女性が仕事を続けられない原因として、「10年先の自分がみえない、見通しがもてない」が1位だったとのことです。

これらを踏まえ、現在、生理学を目指すあるいは携わっている方々（特に女性)にとって､大学院への進学や学位取得後の就職・留学についての不安､子育てや介護など女性に多くかかる負担と研究との両立への切実な問題に対し､経験者からの具体的なアドバイスがあれば､研究の継続とより良いキャリア形成への後押しとなることが期待されます。

一方、「仮にアドバイザー制ができたときなにを相談したいか？」に対しては、「研究と教育の両立」「任期制ポジション」「外国留学」など、男女を問わない項目も上位に挙げられました。そこで、本システムでは対象を全学会員とし、広く相談を受け付けることにしました。

PR

アドバイザー制ご案内

生理学会では、学会員を対象に、キャリア形成や研究を続ける上での悩みに対し、会員のアドバイザーが助言する「アドバイザー制度」を設立しました。

>> 相談申し込み

>> 詳細はこちらから

システム

1．対象

すべての生理学会員、学生会員を含みます。（年齢･性別不問）

2．受付

相談は電子 メールで受け付け ます。相談したい内容を窓口委員宛（※下記アドレス参照）まで送信してください。その際、助言を求めたいアドバイザーを 2名まで希望することができます。ただし、アドバイザーの長期出張など相談を受けられない場合は、窓口委員がその旨返答し、対応を検討します。

特に指定がない場合は、窓口委員が中心となり、アドバイザー間で調整します。

アドバイザーは、 窓口委員を介して、電子メールで返答します 。また、助言は、通常一件の相談について数回のやり取りで終了するものとします。

電子メールを使えない状況にある場合、何らかの手段で窓口委員に連絡すれば、通信手段を相談します。また、原則として匿名での相談は受け付けません。

3．相談・助言に応じる内容

大学院への進学について /学位取得後の進路/任期制ポジション/外国留学/研究と教育の関わり・両立/基礎研究と臨床の関わり/生活(子育てなど)と研究の両立/キャリアアップについて/成果発表に関すること/研究費取得について　など。

セクシュアルハラスメントなど、双方の言い分を聞く必要がある内容については、アドバイザーでは状況把握が難しいので、所属のセクハラ防止委員会などに相談されることをお勧めします。

具体的な就職の世話や論文添削など、本委員会のアドバイザーの立場を超える活動はできません。

4．秘密の厳守

アドバイザーは、相談者のプライバシーを尊重し、相談で知りえた秘密は厳守します。

5．アドバイザー

(注) メンターとは？

メンタリング（ mentoring）とは、知識や経験の豊かな人々（＝メンター）が現時点でまだ未熟な人々（メンティ）に対して、キャリアや心理・社会的な側面から継続して行う、キャリア成功を目的とした、一定期間の支援行動を意味します。語源は、ギリシャ神話のオデッセイが息子テレマコスの教育をメントールという男性に任せ、メントールはオデッセイの遠征中から成人に至るまで、テレマコスを教育したという伝説に由来します。この由来に基き、今日では、メンターという言葉は人生経験の豊富な人、支援者、指導者、後見人、助言者、教育者の役割を全て果たす人を包括的に意味する言葉として用いられるようになりました。

もともとの意味のメンターは、制度で導入されたものではありませんが、組織の中でマイノリティは個人的にメンターを見つけにくいという実態があることから、現在、アメリカの多くの企業では、メンター制度を導入し一定の効果をあげています。

相談申し込みフォーマット

（下記の内容を含んでいれば特に様式は問いません。）

生理学会のアドバイザーシステムの利用者であることが分かるように、subjectには必ず「生理学会アドバイザー制」の文言を入れてください。ない場合、ジャンクメールと判断されることがあります。

送信先アドレス：窓口委員　ABCD　もしくは下EF（直接アドバイザーに送信しないで下さい。）

1．申込者氏名
2．subject　　「生理学会アドバイザー制」を入れる
3．所属
4．メールアドレス
5．希望するアドバイザー
　A.（第一希望）
　B.（2人目を希望する場合）
　C. 特に指定しない
6．相談内容　（長さに特に制限は設けません。）

注・窓口委員をアドバイザーとして希望される場合は、もう一方の窓口委員を通してください。

生理学会大会（仙台）において第一回男女共同参画推進委員会企画シンポジウムを開催

第一部　女性研究者のルーツ

「黎明期の女性研究者
　一理化学研究所の女性研究者を中心として一」
　　並木和子先生（杉山女学園大・名誉教授）

　旧帝国大学（東北大学）が始めて女性の入学を認めたいきさつ、始めて入学を許された丹下ウメ、黒田チカ、入学は認められなかったものの努力が認められて無給副手や全科選科生として北大で研究することが認められた辻村みちよ、加藤セチが、やがて理研でのびのびと研究を進めていった様子を、写真を交えて紹介された。

「女性医師の働く環境 」
　山本蒔子先生（東北大・院 医・非常勤講師）

　30年前に長女出産を機に‘ことりの家保育園’を設立し、また病児保育のための星陵地区病児保育施設を作られ、子育て環境を自力で築き上げて来た経緯を含めて話してくださった。

第2部　男女共同参画の今ー女性研究者を女房にもってー

小田洋一先生（名大・大学院理・生命理学、教授）

子供が病気の時は夫婦で2交代制にして看病と研究を乗り切る、など、夫婦の負担50：50に近づけるべく一生懸命努力。夫婦が家事・育児に協力しながら研究していく秘訣の一つは「職・住・育の接近」。妻であり母である女性研究者にとって必要なものは、「周囲の理解」と「機会の均等」だと指摘された。

高井章先生（旭川医大・生理学第一、教授）

汝の敵を愛せ’とは、妻は研究の時間を奪いあう敵であるから、とのこと。この副題には会場がわいた。子供が生まれる前からお手伝いさん探しを開始し、良い人を見つけ出したこと、その際シルバー人材センターが役立ったこと、保育園活動へ参加すると父親同士の新しい交流が生まれて楽しいこと、文明の利器はどんどん使って時間を節約しかつ喜んで家事ができるようにしよう、外国の学会へも家族で出かけよう、など。

聴衆の一人であった次期大会プログラム委員長の白尾先生（群馬大・医、教授）から、シンポジウムのオーガナイザーなどにどんどん女性がなってほしい、とエール！

シンポジウム開催後記

1. 男女共同参画に取り組む男性は今のところ少ない→
   男性同士の連帯、ネットワークも必要
2. 若手の会との連携の必要性